

国際開発ゼミ紹介

法政大学法学部国際政治学科：弓削昭子ゼミ

わが国の大学の革新的な研究と教育の最前線の動向を読者に紹介するシリーズの新たな試みとして、開発途上国において、ユニークな海外研修を実施している「国際開発ゼミ」を紹介する。（本稿は法政大学法学部国際政治学科の弓削昭子教授に執筆していただいた。）

ゼミ教官名	弓削昭子
教育科目の名称	演習（ゼミ）「国際開発と平和構築」
学生の学年構成と人数	学部 2・3 年生それぞれ 15 人の合計 30 人
海外研修に教官の同伴の有無	無
海外研修参加者の人数と必修か否か	2 年生全員（原則として必修）
訪問する途上国の数	1 カ国
海外研修の期間	約 2 週間
学生一人の平均費用	約 20～25 万円
大学からの財政支援の有無と有の場合の金額	無

1. 海外研修の目的

法政大学法学部国際政治学科の私のゼミ「国際開発と平和構築」では：1) 理論と実践を組み合わせての授業、2) 英文のテキストを使用の上、プレゼンテーションとディスカッションもすべて英語で行う、そして 3) 学生が主体となってゼミを企画・運営する。海外研修はゼミの重要な活動であり、年に 1 度通常 2 月に開発途上国を約 2 週間訪問する。主な参加者は 2 年生であり、その目的は 1 年目のゼミで学習したことを踏まえ、途上国で暮らす人々と開発協力を携わる人たちとの対話を通じて開発の現状と課題についての理解を深め、解決策を模索することである。いわば、ゼミ初年度の学びの集大成ともいえる。そして、その経験を 2 年目のゼミ活動に生かすことで、さらに理解を深め、今後の学習とキャリア形成に役立てることだ。

2. 海外研修の特徴・ユニークさ

海外研修の特徴は、ゼミ生が主体となって訪問国の選定から、研修内容、活動日程などを企画・実施することである。教員の私は、準備段階での全体的なアドバイス、訪問国の選定・研修テーマ・研究方法に関するコメント、訪問機関の紹介や日程の提案などのサポートは行うが、研修旅行には同行しない。ゼミ海外研修に最適な時期である秋学期期末試験後の 2 月が大学・大学院の入試と重なるため、教員は国内で入試業務に参加しなくてはならないことも関係する。

法政大学法学部国際政治学科では、多くのゼミが海外研修を行っているが、ほとんどの場合、

教員は同行しない。その理由を何人かの教員に聞いたところ、「かわいい子には旅をさせよ」であり、「学生のみでの海外研修の方が得られる学びが大きい」とのことである。

3. 海外研修計画の策定方法

海外研修の内容を決めるにあたっては、訪問国の検討と選定、開発テーマの選定、訪問機関の選定と訪問要請、日程調整の順で進められる。春学期に準備を始め、秋学期に詳細を詰めて、2月に実施する。それぞれのステップは次のとおりである。

4月：海外研修旅行の説明と意義確認。春学期の初めに、まず海外研修とは何か、その目的、意義、計画の進め方、達成目標などをゼミで話し合う。前年度に海外研修を実施した3年生が、新しくゼミに入ってきた2年生に説明する形でこれを行う。ゼミ学習の中での海外研修の位置づけと重要性、そして海外研修の企画・実施には相当な時間と労力が必要となることについても、この初期段階にゼミ生が理解することが大事である。

6月：訪問国の選定。海外研修に参加するゼミ生が5、6カ国の候補国を挙げ、それぞれの国について、治安状況、開発課題、訪問機関（可能性）、必要な予算などについてのプレゼンをゼミで行う。この後のゼミ生の話し合いと投票で訪問国が決まる。今までの候補国にはアフリカの国も含まれていたが、渡航費が高いこともあり最終的には選ばれず、今までの6回は、すべてアジアで行われている（ミャンマー2回、カンボジア、フィリピン、スリランカ、ネパール）。

7月：研修・研究テーマ発表（1回目）。訪問国決定後、ゼミ生はその国の開発状況・課題について調べ始め、7月に1回目の研修・研究テーマ発表をゼミで行う。これについては、下のセクション4で述べる。

夏休み：1回目の研修・研究テーマ発表を踏まえ、訪問国の開発課題についての調査を進める。

9月：グローバルフェスタ JAPAN で情報収集。秋学期開始直後の重要イベントはグローバルフェスタ JAPAN での情報収集である。ゼミ生はグローバルフェスタの参加組織の中から、訪問国で活動している団体について調べ、手分けして、それら組織のブースを訪問する。各組織の訪問国での活動の話を聞き、連絡先を交換し、できればその組織の日本事務所訪問と途上国現場訪問のお願いもする。

10～12月：訪問機関のアポイントメント要請と確保。これについてはセクション6で詳しく述べる。この間、研修・研究テーマの調査も進め、2回目（11月）、3回目（12月）のゼミでのテーマ発表・議論を通じて内容の充実化を図る。

1月：最終日程調整と事前学習のための国内組織訪問。

2月：海外研修旅行実施

4. 研修・研究テーマの策定とチームの編成

訪問国が決まり次第、サブゼミ（ゼミでグループワークをするための6～7人のチーム）ごとに研修・研究テーマを検討し、7月にゼミで1回目の発表を行う。発表されたテーマの中には、2週間の訪問期間では調査が困難な課題、焦点が定まっていないもの、すでにJICAや国際機関などが詳細にわたって調査したものなどがあり、研修テーマを変更・修正しなければならない場合もある。上で述べた通り夏休み中に学習・調査を進め、秋学期のゼミでの2回目、3回目のテーマ発表では、研修・研究内容だけでなく、調査方法、訪問機関での質問項目なども含めて議論が行われる。このようなプロセスを通じてゼミ生は研修・研究テーマの内容を明確化し、実現可能なものに絞り込んでいく。

秋学期の初めにはゼミ海外研修旅行チームを設置して役割分担も決める。研修旅行全体の管理をするチーム長の他、アポイント管理の渉外担当、パスポートなどの個人情報や書類を管理する事務担当、旅行会社の選定と連絡の担当などが含まれる。そしてゼミ長と2人の副ゼミ長は計画の進捗をサポートする。

5. 研修・研究の方法論の策定

上で述べたとおり、研修・研究テーマの検討はチームに分かれて進められる。例えば2020年2月のネパール研修旅行では、次の4つのテーマを扱うチームが編成された：1) 農業の生産性向上、2) 防災教育、3) 繊維製品のフェアトレードと生産者への影響、4) トイレの普及と、その改善による公衆衛生への影響。

研修・研究テーマが決まったら、次の方法で研究を進める。①開発テーマについての「問題意識」を明らかにする、②研究のための「問い」を立てる（加えて「仮説」を設定する場合もある）、③出発前の国内関連機関訪問を通じての事前調査、④途上国での現地調査（関連機関訪問および開発活動現場訪問）、⑤調査結果の整理と分析、⑥結論到達。

例えばネパール訪問で「防災教育」をテーマに選んだチームは次のように調査を進めた。「問題意識」を「ネパールで2015年に発生した地震は大規模な被害をもたらしたが、防災対策の一つである防災教育は普及していなかったことを踏まえ、防災教育の強化を通じて防災意識を広めることが重要な課題である」と設定し、「問い」を「2015年の地震後の防災教育に関する支援は効果があるのか」とした。出発前の事前調査ではJICA本部、シャンティ国際ボランティア会、CITYNET 横浜プロジェクトオフィスの訪問に加え、この分野の専門家の話も聞いた。ネパールでは次の組織や活動現場を訪問して情報収集とディスカッションを行った：JICA、国連開発計画（UNDP）、Ministry of Home Affairs National Emergency Operation Center (NEOC)、National Society for Earthquake Technology (NSET)、Mitra Disaster Risk Reduction Learning Center、私立高校のDisaster Risk Reduction Club。調査の結果、ゼミ生は次のことを学んだ。2015年の大地震以前は防災教育があまり行われておらず、国民の防災意識は低かった。地震直後に防災意識は高まったが、時間がたつにつれて、意識レベルが下がっていくことが懸念されている。防災意識を持ち続けることが重要であり、そのためには防災教育の持続性が課題である。訪問した機関が行っている防災教育

では、参加者に興味や自主性を持たせるための工夫や防災教育を定着させるための取組が行われている。しかし防災の知識が、ごく一部の人にしか伝わっていないことも課題だとわかった。従って「問い」の答は、防災教育に関する支援は一定の効果をもたらしているが十分ではないとした。国民全体に防災意識を広めるためには政府の積極的な行動と、さまざまなアクターによる各地域・コミュニティに合った多様な防災教育活動・支援が必要であり、情報の格差および教育の格差の改善にも取り組まねばならないという結論に達した。

途上国で調査を進める際には訪問機関で説明を聞いて質問する、という一方的に相手から情報収集するパターンになりがちであるが、できるかぎり双方向の対話を心がけるようにゼミ生には話している。訪問先に合わせてゼミ生からも日本の状況・経験などの情報提供ができるように準備をするということだ。現地の大学生との交流では、このような双方向の対話が行われている。文化交流としては、折り紙、盆踊り、J-POPなどを毎回、さまざまな訪問先で披露している。

双方向の対話を試みたのが 2017 年のミャンマー研修旅行で「インレー湖の水質汚染問題」をテーマとしたチームだった。「問い」は「インレー湖周辺における水質汚染を改善することは可能か。また、その際に日本で昔行った水質汚染改善の活動を適用することは可能か」。そして「仮説」は「もしインレー湖周辺の住民とホテル等の関係者が日本の佐鳴湖の水質改善の経験を適用して実践すれば、インレー湖の水質は改善される」であった。事前学習としてゼミ生は静岡県佐鳴湖地域協議会を訪問して水質改善事業について学んだ。そしてミャンマーで、インレー湖を管轄する Ministry of Resources and Environmental Conservation の Shan State 事務所を訪問した際に、佐鳴湖の水質改善事例のプレゼンテーションを行った。話し合いの結果、佐鳴湖の事例は現時点ではインレー湖には適用できないという結論であったが、ゼミ生にとってはその要因などを学ぶ貴重な経験となった。

6. 海外研修の段取りと手配の仕方(アポの取得、旅行の手配等)

海外研修の訪問先を決めるにあたって、私は次の点を強調している：1) 首都を含めた都市部と農村部の両方を訪問して、地方では地域の住民たちとの対話を行うこと；2) 異なるアクターを訪問先に含めること。これには、現地政府機関、日本政府機関、国際機関、NGO、民間企業、開発協力活動の現場を含め、できれば現地の大学生との対話の場も持つこと。毎回の海外研修で、これらは実施されている。過去 2 年の研修旅行では、ゼミ生は現地 NGO のアレンジによる 1 泊のホームステイ（スリランカ）やファームステイ（ネパール）という貴重な体験も得た。また、訪問した国の文化を知ることが大事なので、週末や祭日には観光やショッピングなどを日程に入れている。

グローバルフェスタ JAPAN でコンタクトした組織を含め、出発前の日本事務所訪問および途上国事務所訪問、開発協力プロジェクト現場訪問のお願いは 10～12 月に行われるが、一番苦勞が多い段階である。学生の中には、訪問の要請をすれば、アポイントはとれると楽観している者が少なくない。しかし、アポイントの要請が次々と断られ、11 月になっても訪問先がほとんど決まらない年もあった。断られる理由は、治安状況、多忙、お見せできる

成果がまだない、など様々であるが、訪問先の確保が困難になれば、当然ゼミ生の不安は高まる。

私もできるだけアポイント確保のサポートはするが、ここで大きな助けとなったのが、訪問国を良くご存知の方のアドバイスと支援だ。2回のミャンマー訪問の時には藤村建夫氏に大変お世話になり、現地で同行もしていただいた。ネパール訪問の際には、湊直信氏にずいぶん助けていただいた。スリランカ訪問では、在日スリランカ人の友人が現地のNGOや民間企業を紹介して下さった。フィリピンの時には、GLMI(特定非営利活動法人ジーエルエム・インスティテュート)のサポートをいただいた。この場をお借りして皆様にお礼を申し上げたい。

7. 現地での研修・研究中の課題等

現地での最重要課題は安全管理と健康管理である。最初の海外研修旅行はミャンマーで行われたが、ゼミ生12人中7人が体調を崩し、何日も高熱で寝込む学生もいた。その後も毎年の海外研修では数人が体調を崩しており、現地で入院した学生も何人かいた。出発前にゼミ生は20ページほどの「海外研修のしおり」を作成して大学の担当窓口にも提出するが、これには現地日程、訪問先、宿泊先などの他、病気・薬や病院情報、緊急連絡先などリスクマネジメント関連の情報も含まれている。海外研修旅行中はゼミ生は毎日、担当を決めてその日の活動のまとめを写真とともに「弓削ゼミOB/OG」フェイスブックページに投稿する。これにより、私もゼミ生の活動を毎日フォローすることができる。

現地での日程は移動時間などを考慮して、一日の訪問先を3つ以内に限り、各訪問先でしっかりと学ぶことをゼミ生は心がけている。一日の終わりには、全員で集まり、その日の訪問先で学んだことの復習・反省を行い、次の日の訪問先での目的と質問事項の確認を行う。研修旅行中は、このような予習・復習と話し合いが毎晩続く。日によっては、チームに分かれて行動することもあるので、毎日このような形で情報共有して、お互いの研究テーマを関連付けることが大事である。そして最終日には、各グループの報告および研修旅行の成果と反省が話し合われる。

8. 研修・研究の成果

多くのゼミ生にとって初めての開発途上国訪問となる海外研修旅行は、毎日が「目から鱗」の連続である。日本で当然だと思っていた多くのことが当然ではなく、未知の現実や新たな視点に向き合う貴重な機会となっている。

海外研修・研究の意義と効果の大きさはゼミ生の感想文に明確に表れている。また、研修後のゼミ2年目での質問やコメントの内容の深さと鋭さにも反映されている。ゼミのディスカッションでは、より自信を持って積極的に意見を述べるようになり、成長したことがわかるのは嬉しい。

海外研修旅行を大学2年目のゼミ生が自分達で企画・実施する苦勞と学びは相当なものであ

る。上でも触れたが、秋学期は研修旅行の責務が各担当者に重くのしかかり、不安を抱える時期が続く。さまざまな段階での進展と手ごたえ、そして何度もの失敗や挫折を経て出来上がった海外研修旅行は、ゼミ生の汗と苦勞の結晶である。彼らが一体となって海外研修旅行を企画・実施したことで強まった連帯感は、お互いをかけがえのない仲間にしてくれたとゼミ生は口をそろえて言う。

私はゼミ生に「開発課題には一つの正しい答えや対応策があるわけではない」と繰り返し語る。国際開発には多くの多様なアクターがかかわっているので、さまざまな異なる視点が存在し、これらが複雑に絡み合っていることを理解すること。そしてさまざまな開発問題は、分野が違っても相互に関係しており、全部がつながっているということだ。

海外研修旅行を終えたゼミ生が、私が何度も話しているこれらのことを現地で初めて実感できたと聞いた時には嬉しく感じた。海外研修旅行で大きな学びを得たゼミ生には、今後もさまざまな経験を通じて成長を続け、グローバルな舞台で活躍することを期待している。

ゼミ海外研修旅行の写真



2020年：ネパール、Pokhara Women's Skills Development Organizationを訪問



2019年：スリランカ、キャンディ近郊でコミュニティー水供給システムを訪問



2017年：ミャンマー、バガンの小学校で教員との面談後、ゼミ生が理科授業を実施（日本のNGOが作成した小学校3年用の理科実験のモジュールを使用）